

## 第 43 回縮小社会研究会報告

2018 年 11 月 23 日 境 毅（生活クラブ京都エル・ユープ職員）

### 予告：現代の負債とは何か

『債務、さもなくば悪魔』でターナーが「危険な負債」と呼ぶのは、サブプライム・ローンだけでなく、不動産への投資や国債も含まれています。今世紀に入って急増しているこの種の負債について考察します。

1. 負債経済とは何か  
資本主義にとっての異物
2. 資本主義の発育不全  
異物に支配された資本主義の現状
3. 混合御経済の形成  
混合経済の果たす役割

当日の報告は、「負債＝債務の原理的考察」に絞ります。

### 負債＝債務の原理的考察

#### 1. はじめに

負債という用語をグレーバー『負債論』（以文社）を抜きには語れない。この書は人類 5000 年の長期の尺度で負債についてのモラルの変遷について研究したものだ。私が今回報告するのは負債一般ではなくて、現在の金融資産として存在している負債＝債務についてであり、それもターナーが『債務、もしくは悪魔』（日経 BP 社）で分類した「危険な債務」（これにはサブプライム・ローンだけでなく、国債や不動産も含まれている）の原理的な考察である。

#### 2. 負債研究の経過

金融資産は誰かの負債である、ということ述べた吉田繁治『膨張する金融資産のパラドックス』（ビジネス社）の言葉にたく刺激され、ラッツアラート『＜借金人間＞製造工場』（作品社）を読んで、従来金融市場や金融経済と呼ばれていたものが、もはや金融などを行ってはいない「負債経済」と呼ぶべものとなっているという指摘に納得し、そのあとグレーバーを読み、長期的スパンでの負債の存在様式の理解が進み、そして金融（資金の融通）ではなくて負債の蓄積であるという観点から現代の信用制度の分析を試み、2017 年末には負債経済論としてまとめることができ、『情況』2018 年冬号に論文「負債経済とは何か—共同研究のための課題提案—」を寄稿し、また若干修正したものを「ちきゅう座」にも掲載してもらった。なので、負債経済論と負債資本の規定はごく最近私によって定義されたものである。

ちきゅう座掲載論文、後者はターナー論。

「負債経済とは何か」 <http://chikyuz.net/archives/79563>

「晩期帝国主義における負債経済・・・」 <http://chikyuz.net/archives/83567>

#### 3. 本日の報告の狙い

負債といえば借金のことであり、お金の貸借関係であるから、その解明の前提にはお金とは何かという難問が潜んでいる。これについて、私は 1980 年代末に、商品からの貨幣の生成は、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によるものであるという内容を、『資本論』初版本文価値形態論と交換過程論とを関連させて研究することによって、新たな解釈として提案し、この観点から、政治権力という意志の力で商品・貨幣の廃絶をしようと試みたソ連共産党の政治路線が、無意識の領域を意志で規制しようとする背理を含んでいたことをソ連の崩壊直前に指摘し、ソ連崩壊後にはその崩壊の原理的根拠として公表したことがあった。（自費出版：榎原均『価値形態・物象化・物神性』の後記参照）

このお金がどのようにして生まれるか、という私の独自の説は、学界では賛同者はいないが、最近になって平場での研究会で取り上げたところ、好評なので、お金について考えるサークル運動をはじめている。本日はこれについては触れることはできないが、興味を持たれた方は、メール版 ASSB 第 26 巻 4 号を参照してほしい。それには「お金の絵本プロジェクト」と名付けられたサークルでの議論が紹介されている。

[http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog\\_id=244](http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=244)

さて、お金の貸し借りは古くからあり、利子生み資本の古い形態である高利資本は鋳貨の登場よりも古く、古代バビロニアには、鋳貨はなかったが、お金の貸借は楔形文字で粘土板に記録されていた。もちろんこの信用における価値尺度は銀地金であり、銀は都市の成立やそこでの信用制度の形成に先立って、共同体間の交易の結果として世界貨幣として成立していた。

近代になって資本主義的生産の様式が形成されてきたときに、貨幣資本家と産業資本家とのあいだでの貨幣の貸借がだんだん主流となり、近代的利子生み資本が誕生した。他方、高利資本は現在でも生き残っていて、国債や消費者ローンや住宅ローンがそれである。その名称は高利資本であるが、現在では必ずしも高い利子をとっているわけではない。後述するように、高利資本の特徴は貸付けた貨幣が、借り手の手で資本としては機能していない貸付という点にある。

本日の報告では現在のさまざまな負債＝債務を分析する際に、近代的利子生み資本の原理的理解から、それぞれの違いを明らかにし、近代的利子生み資本以外のタイプの負債が異常に増えていること、そしてそのことが資本主義に与えている影響について考察する。

#### 4. 『資本論』第三巻の編集について

本論からは外れるが、『資本論』第三巻の編集の問題について触れておきたい。近代的利子生み資本の原理的説明は『資本論』第三巻でマルクスによってなされたが、しかしその草稿は未完成で、エンゲルスが苦勞してまとめたものだった。最近になってマルクスの草稿が大谷禎之介によって翻訳され、エンゲルスの編集上の問題点も指摘されたテキストが単行本として出版された。（『マルクスの利子生み資本論』全 4 巻、桜井書店）

それによれば、エンゲルスの編集にはいくつかの難点があり、特に商業信用と銀行信用との関連に関しては、マルクスの意図がつかみ損ねられていて、後にヒルファーディングの『金融資本論』での商業信用と銀行信用との関連の理解に悪い影響を与えている。そしてヒルファーディングの見解は日本の信用論研究者の共通理解となっていて、商業信用の限界をのり越えるものとして銀行信用（商業手形の銀行による割引）が位置づけられることになっている。

楊枝嗣朗は、マルクスの草稿が利用できるようになる前から、イギリスの信用制度を研究し、通説となっていた商業手形の銀行による割引を銀行信用のメルクマールとする見解に対して、そもそもイギリスでは商業手形は発達しておらず、資本家たちは内国為替手形を使っていたこと、そして銀行の成立は貨幣取扱業の発達という点から見ておく必要があることを提起していたが、マルクスのノートはこの楊枝の先駆的業績を裏付けることになっている。

一例をあげてみたが、現行版『資本論』第三巻によるだけでは、信用論の研究は今日では不十分となっていることを確認しておきたい。

#### 5. 負債経済とは、その定義

負債経済とは、グローバル資本市場において、お金にお金を生ませる手段である金融商品の由来が、債務を資本として機能させる近代的利子生み資本とは異なるものによって形成されている経済領域を指す。近代的利子生み資本とは異なるものとは、国債や土地所有や住宅ローン、カードローンなどの消費者金融がある。これらは貸し付けた貨幣が資本として機能してはいない、高利資本を根に持つ負債である。これらの負債（債権・債務関係）及びそれに根をもつ金融商品が売買される経済領域（グローバル資本市場も含む）を負債経済と呼ぶ。

#### 6. グローバル資本市場と国際金融市場との違い

グローバル資本市場とは 1970 年代に入って新しく形成されたもので、従来の国際金融市場が変容したものである。その変容の内容は、企業の資本調達の場合から、もっぱら投機と、それによるキャピタルゲイン獲得のための場へと変化したことである。

従来は貿易に伴う外国為替市場とロンドンのシティやニューヨークのウォール街の株式市場や公社債

市場のように、国際的な金融取引が行われている市場だった。

今日では事業に投資するのに必要なお金以上の過剰な貨幣が蓄積され、このお金を運用する市場が、従来の国際金融市場の中に、主として投機的取引がなされている場として、新たにグローバル資本市場が成長してきた。最初は変動相場制に移行して以降の外国為替市場であったが、今日ではそれに加えて、ニューヨークのウォール街の株式市場と公社債市場が中心となり、世界中の資本市場と連携して、巨大な金融機関や投資家がグローバルに投機的な取引をしている。

## 7. 利子生み資本の分類

利子生み資本の一般的範式は、 $G \cdots G'$  であり、お金がお金を産む資本であって、どのように産むかは問われない資本の形式である。

これに対して、その特殊な形態である近代的利子生み資本は、貨幣資本家による資本家的企業家への貸付である。それは次のような運動を展開する。

$G \rightarrow G \rightarrow W+A \rightarrow P$  (生産過程)  $\rightarrow W' \rightarrow G' (G+m) \rightarrow G + i$

この場合、資本家は借りた貨幣で事業を行い、利潤をあげて、そこから利子を支払う。

資本主義社会では、この利子生み資本の特殊な形態が一般化しているのので、それを近代的利子生み資本と名付ける。そして借りた貨幣が資本としては機能していない場合の利子生み資本を、その派生的形態として位置づける。

近代的利子生み資本の派生的形態にはいくつかの種類がある。

それらは架空資本として命名されているが、さまざまな金融資産は、それがもたらす定期的収入があれば、それを利子に見立てて資本還元した利子生み資本として現れる。

株式、社債、国債、土地所有、などが架空資本として規定される。

このほか銀行による信用創造も架空資本の創造である。

先資本主義社会での利子生み資本の主流であった高利資本は、貸し付けた貨幣が資本としては機能しない貸付で、現在では、サラ金、住宅ローン、奨学金、カードローンなどの消費者金融として存在している。

## 8. 二種類の負債: 利子生み資本の二類型

利子生み資本の分類から、二種類の負債があることが判明する。近代的利子生み資本と高利資本である。その種差は、企業家への貸付のように、借りた貨幣を資本として機能させる場合か、消費の用途にする場合かの違いである。後者はかつては国家の戦費や王侯貴族の浪費、飢饉のときの農民の生計費などであったが、現在では住宅ローンなど消費者ローンとなっている。また国債や土地所有もこちらに分類できる。

## 9. 負債資本と近代的利子生み資本

金融工学によって、消費者ローンを証券化することによって作られた新たな金融商品は、高利資本の変異体としての負債資本として定義できる。この負債資本が、近代的利子生み資本や架空資本と並んでグローバル資本市場で膨大に取引されるようになってきた。従来の高利資本は今日の負債経済の中核的資本となっており、この負債資本の属性について研究することが必要である。

近代的利子生み資本と負債資本、共に外観は貸付けた貨幣に利子がつくというもので見分けがつかないが、借りた貨幣がどのように機能しているか、その違いを明らかにし、両者を区別するために、借りた貨幣が資本としては機能していない貸付資本由来の金融商品を負債資本と規定した。それが単なる高利資本の役割を超えて、現代の資本主義の破局をもたらすような資本として変異をおこしているのだ。

## 10. 負債資本の果たす役割: 金融危機の引き金

負債経済が、住宅ローンや耐久消費財のローンの領域に収まっていれば大きな問題を起こすことはなかった。ところがこれらの債務証券が投資銀行によって買い込まれ、それを束ねた証券とすることで、単なる高利資本が負債資本に変異し、グローバル資本市場(ニューヨークの公社債市場)で新規の金融商品として売りに出された。買い手は世界中の金融機関で、ハイリターンを求めて金融資産として確保した。他方で、ローンを貸し付ける住宅金融のブローカーは投資銀行が債務証券を買い付けてくれるので、貸付金が直ちに回収され、それでまた新しく貸付ができる。こうしてどんどん貸付が膨らみ、またこれを根に持つ負債資本もどんどん増えていった。しかし、不動産価格の下落がはじまると、これらの証券は不良

債権となった。リーマン・ショックは株式市場の暴落から始まったのではなく、負債資本が売買されている公社債市場での暴落から始まり、これが株式市場にも波及したのである。

### 11. 負債資本の果たす役割: 金融危機の事後処理の変化

土地バブルが続く限り、グローバル資本市場で売り出される負債資本としての金融商品のリスクは無視できるが、いったん住宅価格が下がり始めると、途端に負債資本のリスクは増大する。こうして負債資本は不良債権化し、それを買い込んだ銀行や住宅関連金融機関が自己資本不足で経営不振に陥いる。これを救済しようとするときに、中央銀行は株式市場での株価暴落時の対応とは全く異なる対応を迫られた。前例なき量的緩和と低金利政策である。量的緩和は、金融機関のバランスシートに残った不良債権（負債資本）を中央銀行が買いとるための措置だった。こうして世界は失われた 30 年を体験した日本の不動産バブル崩壊後の事態を後追いし始めた。本来は資本主義における資本の社会的配分を調整する役割を持つ国際資本市場が、そこでの負債資本のヘゲモニーによって、歪められ、機能不全に陥っている。高利資本はそれが膨張すれば社会を疲弊させる、というその本質が、いま生々しく現れてきたのだ。

### 12. 新自由主義、負債、社会的連帯経済、三者の関連

このように現代の負債をとらえると、新自由主義、負債、社会的連帯経済、三者の関連が見えてくる。これについて、本日は報告できないが、シェーマ化したものを提供しておきたい。

新自由主義の政策としての規制緩和及び金融市場の自由化。→これが金融市場で、資本主義ではない異物である「危険な負債」を増大させた。→この負債の増大によって金融当局者たちも資本主義が発育不全になっていることに気づき、「危険な負債」の除去をしようとしている。→しかし、確かな方法はなく資本主義は発育不全の状態が続く。→こうした中であくまでも成長政策にこだわる新自由主義は、さらなる自治体からの事業の引き出しや、大都市の再開発に期待している。→しかし、このような状況は、地域保全の事業やインフラ的な事業への投資となり、他方で、行政からの委託事業を受けた民間の非営利事業を増大させ、双方があいともなって過渡期の経済の生成となっている。

### 13. おわりに

私は 1960 年安保闘争に参加して以降、30 年間政治運動に関わってきた。ソ連崩壊の原理的根拠が 1980 年代後半に判明し、以降社会運動に取り組んだがそれも 30 年に達している。私の問題意識は自身の運動が敗北したことの根本要因が、ロシア革命以降のヨーロッパ革命の挫折であると考え、その原因究明という形で継続して在野で研究してきた。専門的領域は『資本論』に即していえば、商品論と信用論である。

私の研究成果は次のサイトに掲載されている。また最近英文での発信を試みており、そちらのサイトも紹介しておく。

- オフィス榎原 <http://www.office-ebara.org/>
- 文化知普及協会 <https://www.cultural-wisdom.com/>